

AA 研共同利用・共同研究課題

「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

平成 24 年度第 2 回研究会(通算第 5 回目)

日時: 平成 24 年 11 月 17 日(土) 午後 1 時～午後 6 時

場所: AA 研小会議室(302)

■研究会プログラム

1 日目

【報告 1】津田浩司 (AA 研共同研究員, 東京大学)

「インドネシアの国家英雄ジョン・リー—喚起される「華人」像(2)」

【報告 2】市川哲 (AA 研共同研究員, 立教大学)

「「パプアニューギニア華人」とは誰か?—複合的な対面状況におけるサブ・エスニック・アイデンティティの認定」

【報告 3】奈倉京子 (AA 研共同研究員, 静岡県立大学)

「行為中心的立場から見たミャンマー帰国華僑とミャンマー華人の「華人性」」

総合討論

平成 24 年度第 2 回研究会(通算第 5 回目)として、3 名の共同研究員が過年度報告した内容をブラッシュアップして報告を行った。

第 1 報告では津田が、北スラウェシに生まれ 1988 年に没した退役海軍将校が 2009 年にインドネシアの国家英雄に認定されてゆく過程で、「インドネシア華人の代表」としてのイメージや価値が読み込まれていく様を分析した(⇒「報告 1」の要旨を参照)。

第 2 報告では市川が、「パプアニューギニア華人」という自己認識がどのような脈絡で生じるのかを分析した。この事例を通して市川は、「サブ・エスニシティ」という地縁関係のみならず、移住経験をはじめとする様々な弁別要素が、その場その場の対面関係で要請されることを明らかにした(⇒「報告 2」の要旨を参照)。

第 3 報告の奈倉は、ミャンマー帰国華僑の「故郷=ミャンマー」への訪問に同行した調査結果を踏まえ、中国における場合とミャンマーにおける場合とで立ち上がる「華」(ないし「僑」)が異なるさまを明らかにした(⇒「報告 3」の要旨を参照)。

あらかじめ総合討論の時間を設けていたが、個別報告に対する質疑の中で本共同研究の中心的な問題意識に関する議論が幾度も提起された。いずれの報告に対しても、本共同研究課題の問題意識——対象や概念を所与のものと規定せず、また文化要素やその構成、あるいはその範型を基に(たとえば「現地化／土着化」などと)議論するのではなく、個別具体的事例の中で「Chinese」やそれにまつわるものがどのように析出され、意識化され、実体化していくかを、当該行為がなされているプロセスに即して記述をしていくには、今後それぞれ具体的にどのようにすべきかをめぐって、活発なやり取りがあった。

(文責: 津田)

■「報告 1」の要旨

「インドネシアの国家英雄ジョン・リー—喚起される「華人」像(2)」

津田浩司 (AA 研共同研究員, 東京大学)

本報告では、ジョン・リー(John Lie)という北スラウェシ州マナド市出身の華人系の出自を持つ人物が、インドネシアの国家英雄(Pahlawan Nasional)に認定されたという事実について、それが一体どういう事態なのか、またその認定を通してどのような「華人」の姿が浮かび上がったのかを分析した。報告者は第 1 回共同研究会においてこのテーマについて報告をしているが、今回はその際の議論を踏まえ原稿化した草稿をもとに、討議を行なった。事例の詳細については、第 1 回研究会の【報告 2】を参照されたい。

質疑では、国家英雄というインドネシア特有の制度をめぐる質問が多く寄せられた。その他に重要な指摘として、①他の国家英雄が人々にどのように認識・崇敬されているのかを明らかにしないと、本事例の位置付けが見えにくい、②死後に英雄認定するという制度がゆえに、推戴運動に関わる各当事者が当該人物に関して相当程度自由に、イメージや人物像を読み込んだり付与できるのではないかと、③本共同研究会の問題意識と本事例との関連性をより明示的に記述すべきではないか、などの意見や指摘が寄せられた。

(文責: 津田)

■「報告 2」の要旨

「『パプアニューギニア華人』とは誰か? : 複合的な対面状況におけるサブ・エスニック・アイデンティティの認定」

市川哲 (AA 研共同研究員, 立教大学)

本発表では「華僑華人とされる人々を本質主義的に捉えず、開かれた社会的プロセスとして、あるいは行為体の社会関係として捉えるにはどうすればよいのか」、という本共同研

究の目的を達成することは現時点では出来ないという発表者の意見を述べた。その代わりにあえて「古い時代の人類学」のスタンスに立ち戻ることにより、華人研究が直面する困難の性格を再認識することを試みた。それにより、華人研究が直面する、華人と呼ばれる人々を本質主義的に捉えないためにはどうすればよいのかという具体的な方法を議論した。

その際に本発表が事例として取り上げたのが、自己を「パプアニューギニア華人 (Niugini Chinese, 新幾内亜唐人) と認識している人々である。そして彼ら彼女らが、どのような脈絡で、どのように自分たちの範囲や特徴を意識し想像するのかを紹介した。そしてそれを分析するために本発表が採用したのが、時代遅れとも見做されがちであるエスニシティ研究であり、特にエスニシティの入れ子構造と、エスニシティの対話的性格という二つの概念である。これらの概念を参考に、従来の華人研究でしばしば見られた「サブ・エスニシティ」という分析枠組みを批判的に検討することにより、パプアニューギニア華人がいかにして自分たち以外の華人および非華人と接触することにより、自他を弁別しているのかを考察した。

パプアニューギニア華人と自己を認識する人々の自己認識の方法は首尾一貫していないように見受けられる。しかしそれは異なる脈絡で異なる弁別要素が言及されるため、一見、首尾一貫していないように見えるだけである。従来のサブ・エスニシティ概念に依拠する華人研究は、地縁関係という単一の弁別要素で華人の自他認識の方法を説明しがちであった。しかしパプアニューギニア華人の事例を検討すると、実際には地縁だけでなく移住経験や国籍、使用言語、ライフスタイル等、異なる弁別要素が異なる脈絡で前面に出てくる。そのためこのような現象を理解するために、本研究ではかつて R. ニーダムが単配列と多配列の違いに言及したように、全ての成員に共通する単一の弁別要素を設定して判断するのではなく、複数の弁別要素が異なる脈絡で参照されるという状況をこそ重視するべきであると主張した。

質疑応答では本発表が行ったサブ・エスニシティの変容に注目するだけでは、依然として単一の弁別要素にとらわれているのではないかと、本質主義批判をしている人々が多いが重要なのはそれによりどのような民族誌的記述をするべきかなのではないかと、という指摘があった。

(文責: 市川)

■「報告 3」の要旨

行為中心的立場から見たミャンマー帰国華僑とミャンマー華人の「華人性」

奈倉京子 (AA 研共同研究員, 静岡県立大学)

本報告では、前回報告した「<華>・<僑>の多元的想像・動態的現実—ミャンマー帰国華僑の事例から」(2012 年度第 3 回研究会)の内容を、「行為中心的アプローチ」の概念

を用いて整理し直すことを試みた。その際、以下の2つの問題を設定し、考察を行った。

①前回報告したミャンマー帰国華僑X氏およびX氏の家族にとって、いつ、どのような時に「我々意識」が現れるのか(それが「華人」かどうか)、それは帰国後の中国における場合と、移住先国ミャンマーにおける場合とで、相違点があるのだろうか。これらについて、地元の人との違い(境界)に留意しながらもう一度資料を見直す。②ミャンマー帰国華僑の人々がどのような記憶を(再)生産し、それによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ実現しようとしているのか。

加えて、今回の報告では、報告者が2012年8月30日～9月15日の期間、X氏のミャンマー親戚訪問(ヤンゴン、オティーエゴン(othegon)、タウンゲー)に同行することで知り得たミャンマー華人社会の様子やX氏の「故郷」ミャンマーに対する考え方に関する情報も用いながら、前回の内容を発展させることを目指した。

まず、中国に帰国してからのX氏の生活環境から見えてくる「我々意識」の要素について、地元の人との違い(境界)に留意しながら考察した。「<僑>である限り最低限の生活は保障される」、「地元の人と違って、頼れる人がいない、後ろ盾がない、自分を頼りに生きていかなければならない」、「なかなか状況をかえることができない」、「困ったことがあると、ミャンマー帰国華僑で江西の学校の同級生(公務員)に相談する」、「心の引っ掛かかる場所、愛着がある場所がない」といった語りは、帰国華僑としての特殊な身分を自覚していること、土地との結びつきがないことなどを示している。さらに、「厦門市帰国華僑聯誼会」の参加に加え、「港澳緬僑交流会」(現在香港、マカオに居住する、かつてミャンマーに居住していた中国に血縁・地縁関係をもつ者によって組織された交流会)、「世界緬華同僑聯誼大会」(かつてミャンマーに居住していた世界に広がるミャンマー華人の会)も開催されており、間地域的な同胞意識の生成も見られることがわかった。これらの中国における考察から、いかに地元の人と違うか、ということに我々意識をもっているといえる。しかしこれを「華人」としての現れとは言い難い。

次に、ミャンマーに里帰りをしたX氏が、彼女と関わりのある人々と再会した時の様子や、かつての出身地の現在の生活環境を紹介しながら、そこからみえてくる「我々意識」、「華」、「僑」の要素について考察した。コミュニティ(社会関係、生活空間)の中で、中国廟の信仰、行事の運営(当番制)、冠婚葬祭の出席など、コミュニティ全体が華人を華人として生きさせるように導いていること、華人墓地の存在、婚姻関係、自己紹介の仕方、などから華人としての姿が明確に見られたことを報告した。

結論は以下の通りである。帰国後中国では、地元の人とは違うことを自覚し、元移住先の記憶・経験を理解しあえる仲間を求めている。そこでは、「ミャンマー的」であることが個人・家族・集団の中核となっている。このような地元の人との違いは、「華人」として立ち現われているというよりも、「僑友」、「僑胞」、「港澳緬僑」、「世界緬華同僑」というように、「僑」として現れ、また拡大している。一方、X氏の移住先国ミャンマーでの様子を、観察者の立場とX氏の立場からみると、現地に居住している中国系(と自覚し

ている)人々は、文化的にはミャンマー化が色濃く見られるが、「華人」意識が明確である。X氏はミャンマーでは「華人」として現れていた。

報告後のコメント・質疑応答では、以下のような意見が出された。

- X氏の語りから離れて研究者からみた「華人」の立ち現われ方の考察になってしまっているため、ミャンマー訪問の際のX氏の語りから資料を再構成させることにより、中国—ミャンマーにおける意識の相違が見えてくる。
- ミャンマーで中国に関係のある場所を回ったのはなぜか。報告者が中国系の人々を調査したいと伝えたからか。
- 「僑」にも「華」の要素が入っている。完全に2つに分けて語ることは難しい。
- ミャンマーに対する記憶の語りを整理してみたらどうか。

以上のコメントを参考にし、報告書執筆につなげていきたい。

(文責: 奈倉)